日本文学全集 2

樋口一葉

たけくらべ 他

国木田独歩

武蔵野　春の鳥 他

河出書房

日本文学全集 2 樋口一葉 国木田独歩

© 1975

責任編集
武者小路実篤　川端康成
石坂洋次郎　山本健吉
瀬沼茂樹

昭和44年10月20日　初版発行
昭和50年8月8日　8版発行

著者　樋口一葉　国木田独歩
発行者　中島隆之
印刷者　和田彰三
装幀　原弘

印刷・東洋印刷株式会社
製本・中央精版印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京（292）大代表　3711
振替口座　東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目次

樋口一葉

うもれ木……七
雪の日……二四
大つごもり……二八
にごりえ……三七
十三夜……五六
たけくらべ……六八
わかれ道……九六
われから……一〇三

日記抄……二四
国木田独歩
源叔父……一五五
武蔵野……一六六
忘れえぬ人々……一八二
鹿狩……一九一
牛肉と馬鈴薯……一九九
富岡先生……二一五
少年の悲哀……二三二
酒中日記……二三八
空知川の岸辺……二六五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

非凡なる凡人……二七五
運命論者……二八四
馬上の友……二〇二
第三者……二一二
春の鳥……二二〇
二老人……二二八
竹の木戸……二四四
独歩吟……二五八
年譜　二六九
文学入門　吉田　精一　二七九
作家の横顔　和田　芳恵　二九一
稲垣　達郎　二九五

樋

口

一

葉

うもれ木

第一回

描き出だすや一穂の筆さきに、五百羅漢十六善神、空に楼閣をかまえ、思いを廻廊にめぐらし、三寸の香炉五寸の花瓶に、大和人物漢人物、武者の鎧のおどしを工夫し、殿ばば、神代様うずたかく、元禄風の雅なるもあれ上人に装束の模様をえらみ、あるは帯書きに華麗をつくす花鳥風月、さては清楚を極むる高山流水、意のおもむくところ景色ととのいて、濃淡よそおいなす彩色の妙、砂子打ちを楽と見る素人目に、あっと驚歎さるるほど、われ自身おもしろからず、筆さしおきてしばしばなげく斯道の衰頽、あわれ薩摩といえば鐔節さえ幅のきく世に、さりとは地に落ちたりわが錦襴陶器、おもい起す天保の昔、苗代川の陶工朴正官、その地に錦様の工みなきを歎じ、歳十六の少年の身に、奮い起す勇気千万丈、奉行を説き藩庁に請い、堅野に二人の教授をむかえて、相伝法受の苦を尽くしつ、なお心胆をねる幾春秋、安政のはじめ田の浦の陶場に、焼着画窯の良結果を奏するまで、刻苦艱難いくばくぞや、それが流れに浴する身の、美術奨励の今日うまれ合わせながら、ここ東京の地にばかり二百に余る画工のうち、あっぱれ道の奥を極めて、万里海外の青眼玉に、日本固有の技芸の妙、見せつけくれんの腸もつものなく、手に筆は取り習らえど、心は小利小欲のかたまり、美とはなんぞ儲け口か、ないし吉原洲崎のちりからたつほう、品川にもまた捨てられぬ代物ありと、口三味線の筆拍子に、なぐり書きしての自慢顔、とかくは金の世の中に、優でござるの妙で候のと言うところが、つまりは仕切り直段の上にあること、問屋うけのよき物一致ありがたしとは、そもいずこより出ることばぞ、さればこそ売国の奸商どもに左右されて、またも直下げまたも直下げと、さらでもの痩せ腕ねじられながら、無明の夢まだ覚めもせず、これでは合わぬの割り仕事に、時間を厭い費用を減じて、十をもって一に更うる粗画濫筆、まだ昨日今日絵の具台に据りて、稽古は居ねぶりの白雲頭を、張りこかして手伝わする淵ぶがき腰がきの模様、霞砂子みだれ砂子の乱れ書きに、美という字は拭いさる絵のぐ雑巾の汚れ同様、さりとは雪がれぬ恥ならずや、このままならば今十年と指おらぬ間に、

今戸焼の隣りに坐をしめて、荒もの屋の店先に、砂まみれにならんも知れたものでなし、これほどのこと気のつかぬ、痴漢ばかりあるはずなけれど、時の勢いは出水の堤、切れかけたも同じこと、われらふせぎはとんと不得手、まずは高見で見物が当世ぞと、頬杖つきて宙腰の、ふらふらとせし了簡にはおのれおのれが不熟心を、地震雷鳴おなじ並みに心得て、天だ天だと途方途轍もなき八つ当り、的になる天道さま気の毒なり、さりながらそれも道理、身は蜻蜓洲幾十万の頭かずに加わりて、竈の煙の立ち居にまで、かしこき大御心なやませ奉る、かたじけなき心得もせず、大日本帝国の名誉ということ、もみくちゃにして掃きだめの隅に、投げ出すような罰しらずが、そこらあたりに珍らしからぬ世の中、憤るほど管なるべし、さりともわれはわが観念あり、握りそめたる筆の因果、よし狂といわば言え愚と笑わば笑え、千万の黄金つんで来るとも換えぬ心を腕にみがきて、軽薄浮佻を才子と呼ぶ明治の代に、愚直の価どれほどのもの、熱心の結果はいかに、斯道の真はいずくにあるか、よし人目には何とも見よ、わが心満足するほどの物つくり出だして、われ入江籟三変物の名を、陶器歴史に残さんずもの、口惜しや赤貧の身の、空しく志を抱いて幾年間、このままならば胸中の奇計、なんに向っていつ描くべき、恨みはこれぞこれ骨までの恨みぞと、取りしむる右の腕手首ぶるぶると顫えて、煮えよ腸、熱涙のみ込みつつ悲憤の声は現わさねど、誰れいうとなく慷慨先生と仇名して、酒席の噂はずれぬ代り、柴のと扣くものまれまれなれば、友なく弟子なく女房なく、お蝶とよぶ妹相手にして、ここ高輪の如来寺前に、夕顔垣にからみ蚊やり火軒にけぶる詫住居、渋団扇に縁のある暮しをなしけり。

第二回

散る木の葉にすら、笑みぞあまると聞く十六七を、貧にくるしめば月も花も皆なみだの種、同じほどの少娘が、はやりし帯に新形染めの裕衣きて、姿どこやら嫋やかに、よく見ればよくもなき顔だちも、三割とくの白粉ぬりくり、幾度じれたる癖直しの、お蔭にふくらむ鬢つきたぼつき、あっぱれ美人の招牌うって、摺れ違いに薫る香水の追風まで、ぱッとせしいでたちの夕詣で、何を願いぞ、神さまさぞやお困りの連中に、顧みられてわが形はずるとなけれど、快よからねば洗いざらしの裕衣の肩、われ知らずすぼめて小走りするお蝶、並らぶ縁日の小間もの店に目もくれず、そそぐは一心兄の上ばかり、願いは富貴でなく栄華でなし、わが形この上の襤褸に、よしや縄の帯しめよとまま、われ生涯に来べき運、あらば兄様の身にゆずりて、腕の光りの世に現わるるよう、みがく心の満足されるよう、二つには同じ画工の侮り顔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

する奴を、兄さまの前に両手つかせたく、仏壇のお二た方に、お位牌の箔つけて欲しきがそもそもの願い、手内職の手巾問屋に納むる足をそのまま、霊験あらたかなりと人もいう、白金の清正公に日参の、こむる心を兄には告げねど、聞かば画筆なげ出して、芸に親切の志、われまだそなたに及ばずとや言わん、下向はことに家のこと気になりて、心も足もいそぐ道の、とある小路におびただしき人だち、喧嘩か物とりか何にもせよ、側杖うたれぬようと除けて通る、多くの人の袖のしたを、洩れて聞こゆる涙ごえ、ふっと耳に止まりてわれしらず差しのぞけば、憐れや五十あまりの老女、貧にも限りのなきものかな、われに比べて今一倍あさましき有様、むかしは由緒ある人か皺める眉目どこか品もあるを、不憫やこれが商売の、何焼とかいう銅の板、うち渡せし小屋台のかげに頭ずりつけて繰りかえす詫びごと、相手は三十ばかりの髭むしゃくしゃと、見るからが憎くげな奴、大形の裕衣胸あらわに着て、力足ふみ立てつ耳も聾いよと喚き立つるは、いずれ金が敵の世の中、もっともとは懇意ずくの、生まれながらに顔赤め合いしなかでもあるまじきに、始めは伏し拝みて受けたる恩、返えすことのならぬは心がならず、この社会に落ち入りし身の右左不如意にて、約束せしこと約束のようにもならねば、われと恥じて心ならぬ留守も遣い、果ては言いたくなき嘘に、一月を延ばし十五日を過ぐせど、そのあげくさてなんともならず、つまりつまりて烏羽玉のやみの夜、家ぬしの垣の外に両手合わせて拝みながら、不義理不名誉の欠落ちもすめり、さてもこの老女その類いと覚しく、あたりはずかしや小声の言いわけ、かつは涙ながらのことばとて、首尾全くは聞えぬものの、取り集めて察すれば、娘にやあらん杖はしらの子、煩いているかの様子、それ本復さえなさばまたつくべき方もあり、今しばしの間まちて給われと、あわれ腸しぼり尽くす悲しげな声、聞くお蝶は涙もろの女の身、ましてや同じ情くみて知らぬこともなければ、なんの人事と聞き過ぎられず、さりとはあの男の聞きわけなさ、百円のかたに網笠なれどこの屋台おこせという、それ取られては私と娘、今日から喰べることがなりませぬお慈悲と合わす手を、あれ打ちおった、憎くい奴にくい奴、自分は手前はさして困る様子もなく、大々しい身体つきの病いけもなさそうなに、あの老人のしかも病人抱えて、困苦さこその察しもなきは鬼か夜叉か、あらばあの横つら金で張って、みごと老女救ってやりたきもの、それどころではなき身、この財布の底はたけばとて、何になるものでなし、口惜しや可愛やと、お蝶身もだえするほど残念がり、黒山と立つ人じろり眺めて、せめて一人はこの中に憐れと見る人ありそうなものと、歎息する一刹那、お蝶の肩さき摺るほどに

して、猶予もなくずっと出でし男、何ものと思うまもなく、たけりたつ鬼男の前、振りあぐる手の肘を止めて、軽くふくむ微笑の色、まず気を呑まれて衆目のそそぐ身姿はいかに、黒紹の羽織に白地の裕衣、わざとならぬ金ぐさり角帯の端かすかに見せて、温和の風姿か優美の相か、言われぬところに愛敬もある二十八九の若紳士、老女の方顧みさまことばつき叮嚀に、私通りすがりの身、来歴は何か知らねど、たかが女なり老人に失礼はありがち、あれ御覧ぜよあの通り詫びてもいること、往来はそのうちにも人の目口うるさきに、洋刃の厄介も御身分がらいかがや、なんと私にここの花、もたせては下さらぬかと、青柳のいと優しく出れば、はてさて他人のいらぬ口出し、詫びやことばですむほどなら、われら今ごろは手を引くはずなり、済まぬ次第ききたしとならば聞かせもせん、われら二た月三が月、雨露しのがせたこともある大恩人、その上にあやつめが口車に乗せられて、五円という大金貸したはこっちも商売ずく、五一の利足はよしや天地が逆さまにもなれ、一人子の病人死にもせよ、待ってやる約束もなければ、負けてやる覚えもなし、それになんぞや泣きごとの数々、地蔵の顔も方図のあるもの、利足の形にも不足なれど、何一つでも取るが取り徳、この代物引き取って行かんというは、あまり無理でもなきつもりと、鼻で笑う髭づら憎くし、若き男はからからと高笑いして、何ぞと思いしに金ですむことなりしか、さりとてはわけもなし、いらぬ他人と言わるれど、いずれ四海の内輪同志、金はわれ立て換えんと、紙入れ探ぐって五円札一枚一円一つ、これではまだまだ御不足ならんが、内実持ち合せこれぎりなり、なんと雨露しのがせるほどの大恩人さま、了簡しては遣わされぬかと、あくまで柔和は粧いながら、いなと言わばあの純白の拳いずこに揮って、あの髭男微塵になるも知れがたしと、芝居気のある見物が囁きおかし、かの男は搔きさるように、金ふところにねじ込んで、取り出だす証書幾通、幾多の人の涙の種を印刷にせし文言名当て、あれかこれかと探がし出して、よしかたしかに渡しましたぞ不足を言わばまだまだなれど、取らぬにはましこれで算用ずみとすれば、老婆めは大した儲けもの、いい親分見つけ出してこれから利の出ぬ金借りらるるやら、人事ながら慈善家の末が案じられると、冷笑って払う裳の塵、礼も返さず恥じもせず人かき分けてのさりのさり、行くての大地裂けもせず、つまずく石のなきもいぶかし、若き男は老女が陳ぶる礼よくも聞かず、なんのなんのこれしきのこと、あったればこそ役にも立ったれ、なくばわれとそなた様といずれ替らぬ難義の淵、浮き沈みは浮世の常に、お礼はそなた様大分限になられし時、こなたより御催促に出るまでは、お預けのことお預けのこと、はて名告り

をするほど聞こえてもおらぬ名、まずそれもご免なされと、取りすがる袖引きはなして、優然と去る後ろ影、光明赫灼として輝くとぞ拝まれぬ。

第三回

歳十三の暁より、絵筆とりそめて十六年、一心この道に入江籟三、富貴を浮雲の空しと見れど、なお風前の塵一つ、名誉を願う心払いがたく、三寸の胸中欲火つねに燃えて、高くかくるべき心鏡くもりというはこれのみなり、されば とて世に媚び人に媚ぶること、生をかえぬ限りならぬ質、われより頭下ぐること、金輪奈落いやという一点ばりに、頑物の名高くなるほど、我慢と意地は満身に行きわたりて、入れられぬ世といよいようしろ向きになる心、見おれこの腕なにが住むか、一飛得意の暁にはと、人も聞かぬ大言はさて、わずかに熱腸を冷やすものの、さても諸道のさまたげと言う、貧よりほかに伴侶のなき身、その得意の暁いつとか待たん、弥勒の出世と並らべ立てて甲乙のなきものよと思うに、口惜しの念胸をさして、瞼の合わぬ夜半も多かり、寝ぬに明けたるある朝、おく庭草の露を見て亡師のことふッと思い出し、にわかに寺参りしたくなり、垣根の夏菊無造作に折りとって、お蝶がしばしと止むるも聞かず、朝飯まえに家を出でけり、寺は伊皿子の台町なればさまでには遠くもあらず、泉岳寺わきの生垣青々とせし中を過ぎて、打水すずしく籠木目のたつ細道を、がらりざらりと百足下駄に力を入れて、纏わる片裾うるさしと、捲くり上ぐるや空脛あらわに、なんの見得もなく、身に小男の面ざし醜くからねど、色黒々と骨だちて、高き鼻しまりし口、眼ざしぎろりと青く凄く、沈欝の症どこか淋しく、紺薩の古手に白兵児の姿、ふところに建白書相応なれど、右手に持つ夏菊の花の色、さすがにやさしきところも見えけり、心こって見る目には、映るものも映る物も皆その色、細づくりの格子戸まえに、米沢数寄屋の肌つき美くしき人、黒繻子の帯腰つきすっきりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髪に根がけの好み、さても美かなさても美かな、この美にすさむ心がけをわが陶画の上に移して、ともに協力の友を得たしと、茫然自失ながめ入れば あれ薄気味の悪るき人と、逃げこまれてわれながら、取りとめなき考え馬鹿らしく、振りむきもせずまた五六歩、三歳ばかりの男の子のちょろちょろと馳せ出でしが、袖なし裕衣の模様は何、籬に菊の崩し形か、それよ今度の香炉にあの書き廻しも面白かるべし、注文は竜田川とか、なんのわが腕でわが書くに、いらぬ遠慮究窟くさし、先師の言いつけよりほかは他人の意見いれたことなき籟三、身貧に迫って意を曲ぐるなどいやなことなり、さりながらわれ頑物の兄ゆえに、世の人並みのこと

もせず、米味噌醤油に追い使わるるお蝶、思えば兄風も吹かされねど、成り行きと諦らめていてくれる様子、それもそれなり、時運めぐらばいつかは花も咲くものよ、衡門に黒ぬり車出入させて、奥様と尊めらるるようになるも不思議はなし、ああその衡門よりは、あっぱれの人物えらびて添わせたきものと、何がなしに案じてふッと仰げば、今も想像の衡門に、篠原辰雄といかめしき表札、さても立派の住居かな、主人公はどんな人、身分はいかに、愛国の志ある人あらば、日本固有の美術の不振、わが画工疲弊の情、説かば談合の膝にもと、夢知らぬ人に望みを属す、狂気の沙汰に心もつかず、あれを思いこれを思い、いつとはなしに坂も登りぬ、寺門くぐり入れどお僧どの寝坊にや、まだ看経の声もなく、おのずからの寂寞境に、あさ風さっと松に吹いて、身にしみる心地なんとも言えず、本堂をめぐりて裏手の墓処へと、手桶のならぶ阿伽井のもとを過ぎる時、入江様しばしと呼び止める声、少し覚えのと顧みれば、つかつかと馳せ寄って、物言わず大地に両手を突く男、あやしや何者と呆れて立つ、足もとに身を縮めて、お見忘れかただし人外の私、おことばも下されまじとか、正路潔白の君に対して、合わすべき面貌もなく、言うことば出どころもなき失策、後悔しぬきし改心の今日、わが田へ水のいいわけではなし、懺悔に滅ぼしたき罪のあらまし、聞いて給わる人ほかになき身、相弟子のよしみ昔なじみ、君を見かけてのお頼みと、頭も上げず詫り入る体、領足みごとに耳うらに二つならぶ黒子、それなり姿こそ変りたれきゃっ新次め、先師がことに寵愛にて、行く行くは養子にもと骨折られしを、生地注文にと多分の金引き出して、そのままの行方しれず、師の臨終にもあり合わさぬ人非人、今ごろこころをうろつくこと憎くし、なんの相弟子失礼至極と、生来の疳癖目尻に現われて、言うことよくは耳にも入れず、聞きたくなしお黙りなされ、相弟子ならば兄弟分、言うことあり咎むることあり責むることあり、さりながらお前様とわれなんでもなし、他人も他人見ず知らず、入江籟三潔白を尊ぶ身の、友とも仰せらるるな、なかなかの耳ざわりなり、そこ退きて給われ、露をさながら志の手向けの花、萎るるも口惜しければ、ことば少なに行き過ぎる袂、あわただしくまずとひかえて、御もっともながら恨めしきおことば、責め給え咎め給え、罪と知って苦るしき身の上、御折檻の笞にも逢わば、かえって身の本懐なるを、捨てて顧みぬ他人向きの仰せ、昔の入江様、今日の入江様、お人替りしか、お心二つか、われ今までの目違いか、君を先師の形見とみて、改心の実も謝罪の情も、君によって現わしたき願い、さりとは画餅のおことばかなと、半ばいわさず振りかえる籟三、だまれと一と声鬱憂の気のこりたる余

り、物あらば当らん破裂の勢い、唇ぶるぶると顫えて生来の訥弁いよいよ訥に、おのれ新次人非人、恩しらず義理知らず道しらず、おのれが罪の身を責むるは知らず、われを批難するか、われを批難するか、われ籟三昔も今も、正義を立て公道を踏んで、一歩の過ち覚えなき身、どこのいずくになんの欠点、言い聞かん言い聞かんと、詰め寄る眼尻きりきりと釣って、おのれ不忠不義の奴も、先師寵愛の余りには、世にその罪を包まれて、知る者は師とわればかり、われ一とたび言わじと定めて十年近く、この口開かねばこそおのれ安穏に、月日の光り拝むは誰が庇護、頼まれずとも折檻の笞ここにあり、墓前へ手向けん志の、この花で打つに不思議もなし、打ち手は籟三精神は先師、口惜しくば身にしみよ骨にしみよと続け打ち、手に持つ菊花なげつけて、にらみつむる眼の内に感じ来たれる新次が体、昔ながらの美顔今一層の品を備えて、あわれ好男子身じろぎもせず、瞼にあふる後悔の涙、眉宇に満つ慚愧の状、この人先師の愛せし人、われに謝罪と思い込みし人、憎くむが本義か、捨つるが道か、とばかり迷って判断の胸うやむやになる時、静かに頭を上げて言い出づる一通り、聞けば誤りたりわれ短慮軽忽の処為、この人の罪罪ならず、とるところ岐路に落ちし不幸の身と、まず憐れみの情より聞けば、私もとより私欲にあらず、小を捨てて大につく国利国益の策、立てしというがそもそもの破滅にて、思えば了簡が若かりしなり、腕を組みての考えと手を下ろしての実験とは、冠履の相違雲泥の差別、人はわれより利口にて、世は思うままならぬものと、つくづく歎息するにつけて、正義は人間の至宝ということようように発明し、才ばしりたる考え身を離れしは、いよいよ無一物の暁が、た、爾来幾年志を磨きて、遠国他国に流浪の結果、不思議に人らしく世に言われて、少しは名をも知らるる境界、今歳めずらしく帰京の錦、心に飾って拝顔を楽しみし、師君はここ草陰若下の人、松風に袂をしぼって幾朝くむ阿伽井の水の影見ぬ人に残念は増さりて、ひとしお君のこと懐かしく、慕わしかりし昨日今日、打たるるも嬉しく罵らるるも嬉しく、真の兄弟に逢う心地と、保ちかねてこぼす涙一滴、見る見る籟三感歎して、大地につく手まず上げ給えと扶け起して、知らざりし今までの失礼、知りての後悔、打ち割りし意中に物のなきは見え給うべし、いざ御墓前に中直りせん、心おくことかと光風霽月、引いて立つ手に恨みも残らず、取りなせば、これも先師の導き、ありし朋友なり相弟子なり、君も訪い給え、お前様も来て御覧ぜよ、お住居はどこぞ、ここよりは遠からぬ如来寺前に、引き結ぶ庵の草深きところがそれ、さては目鼻のわが宿もこの坂下、篠原と呼ぶが当時の性なり、さりとは奇遇よ辰雄殿とは君のことか。

第四回

月に恨み風に憤り、天下を悪魔の巣窟と見て、黒暗々の中にさまよいし籟三、どこともなく一点の光りかすかに見えて、前途の企望ようように大きくなりぬ、以前の新次、今の篠原辰雄と呼ぶ男、ありし職人時代には、負けぬ気象の人受けよからず、師匠の愛のおびただしきほど、憎くむ者さまざまの説を構え、傲慢と罵り狡猾と嘯りて交際する者まれなるを、籟三例の弱きもの助けたく、弟のように贔負せしが、恩は二代の親も同じ、師匠の金持逃げするほどの奴、師匠もわれも目違いと諦めて、なまじい恥を世に現わさじと、包み通せし七八年目、どこぞで悪人の仲間入り、今ごろは何になりてと、折ふしの思い出種、さすがに忘れぬところもありしに、思いきや今日の身分、変りも変りし立派の紳士になりて、しかも執る主義の高潔さ、話し合うほど頼もしさ増さりて、墓参帰りの半日を篠原のもとに説きつ説かれつ、辰雄今日までの経歴につきても、善事と悪事を洩らさずかくさず、篠原と呼ぶ今の家、何某地方の金満家なりしこと、そこに住み込みの初めより、次第に気に入られて一人娘に聟養子となりたること、その身戸主となりて二年とたたぬ間に、親女房とも引きつづきて病死せし不幸さ、さてその幾万の財産指のさしてなく、わが自由になすもつらく、家につきての縁類にゆずりて、身退きたき願いも、世の人さらに聞き入れてくれず、そのまま安座逸居の身、わが位置たかまるにつけて湧き来たる企望のさまざま、及ばぬと知って捨てられぬがこれも癖にや、社会のための東奔西走、ここ東京に計画ありて、出京の昨日今日、なまなかこなたかなたに名を呼ばれて、称えらるる身汗あゆる心地、昔をおもえば大恩の師に、よしやわけは何にもせよ重ね重ねの不始末もあるを、そ知らぬ顔に青天をあるくさえ、日月の手前恐ろしく、世を欺くに似て心安からず、手を置かぬ胸夢おどろきて、人知らぬ罪なかなかにくるしかりきと、腹ある限り告白して、いさぎよしとする様子、うわべをつくろいて底にごる、軽薄者流を厭う目には、よくも返りし本善の善、まれなる人よと感じられて、過ぎし過失は美玉のくもり、しかも拭い去って見るに、かえって光りは勝る心地、籟三しきりに憎くからずなりぬ、なかなか物語り尽きもせぬに、交際ひろき人のならい、訪問者陸続とうるさく、なんと入江様、人気なき閑静なところにて、一日ゆるりと御高説承りたし、君はいつもお暇かと問われて、はてさて貧者に余裕はなし、気楽なことといい給うな、人気なきところと言わば、われ代住居の閑静さ、裏の車井に釣瓶くる音かも、表に子守り歌きこえるくらいのもの、ここよりはついそこなり、いつぞは来て御覧せ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo